

聖書は逆説に満ちている

風間 規男

奨励者紹介 [かざま・のりお]

同志社大学政策学部長

[研究テーマ] 政策の形成及び実施の過程の分析

「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言う。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切に
しなさい。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。あなたの頬を打つ
者には、もう一方の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。求める者
には、だれにでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。人にしてもらいた
いと思うことを、人にもしなさい。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあ
ろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。また、自分によくしてくれる人に善いことをしたと
ころで、どんな恵みがあるか。罪人でも同じことをしている。返してもらおうことを当てにして貸したと
ころで、どんな恵みがあるか。罪人さえ、同じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。し
かし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうす
れば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪
人にも、情け深いからである。あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者
となりなさい。」

(ルカによる福音書 6章 27—36 節)

チャペル・アワーにお招きいただき、ありがとうございます。

実は、春学期にお話しする予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大によってキャンパスが閉鎖
されるなどしたことで中止になってしまいました。

私の記憶ですと、このような形でお話しするのは、今回で3回目になると思います。私は、40 歳になっ
てからカトリックの洗礼を受けました。学生の頃は、キリスト教には全く関心がありませんでしたが、妻がカ
トリックの信徒だったことなど、いろいろなことが重なって次第にキリスト教に関心をもつようになり
ました。カトリック的に言うと、神に招かれているなどと言います。

これはカトリックもプロテスタントも同じだと思いますが、洗礼を受けるまでの間、キリスト教や聖書に
ついて勉強する期間があります。その場の思いつきで洗礼を受けてはいけなくて、どういう宗教なの
か、神を信仰するとはどういうことなのかを学んでいくわけです。

聖書には、マリアが処女のままイエスを身籠ったとか、イエスが死んだ人を生き返らせたとか、ゴルゴ
ダの丘で亡くなってから3日目に復活したとか、近代合理主義、科学主義の世界で生きている私たち
には、簡単には信じられないエピソードがたくさんあります。私も、最初、こういったことにいちいち引
かかっていたのですが、今では達観していて、科学的に説明できることを信じるのならばそれは宗教
ではない。とんでもない話を信仰するから宗教なのだと考えています。

それよりも今、聖書の中で私が気になっているのは、イエスの教えや行動が、当時の人間だけでなく、今

の人間から見ても、ひっくり返った世界、あべこべの世界を求めているということです。メッセージタイトルの「聖書は逆説に満ちている」というのは、普通の人間なら誰でも自然に考える、その考えをひっくり返そうとしている、普通の思考パターンを揺さぶっている、そういう話がたくさんあるというお話をしていこうと思っています。

今日朗読いただいた箇所は、キリスト教徒ではない人も聞いたことがあると思います。敵を愛し、あなたがたを憎む人に善を行いなさい。自分を呪う者を祝福し、あなたがたを辱める者のために祈りなさい。あなたの頬を打つ者に、もう一方の頬を向けなさいとまで言うのです。この神経、普通ではないと思いますが、この言葉が一般にも有名なのは、ここにイエスのメッセージ、福音の本質があるからなのだと思います。

イエスの言葉に従うのが信仰だとすれば、信仰を貫くことは限りなく困難なことだと思います。自分を憎む者を愛する。自分にひどいことをした人を許す。そういう目にあっていない時には、「そうしたいな」と思うかもしれませんが、実際にそういう目にあったら、怒りがこみ上げ、「倍返し」したくなってしまいます。

日常生活を送る中で、「だれでもそう考えるよね」という社会の共通理解があります。これを社会科学では、パラダイムと言います。私たちは、パラダイムの中で生活し、パラダイムに従って生きていけば、他の人も共感してくれると安心することができます。

聖書の中のイエスの言葉や行動には、そのようなパラダイムを揺るがすような話がたくさん出てきます。たとえば、マルコによる福音書の9章 33 節以下に、次のようなことが書かれています。イエスが「ここに来るまでの道すがら、何を話していたのか」と弟子たちに尋ねます。弟子たちはおし黙っています。なぜかと言うと、誰が一番偉いかを話していたからです。イエスは、12 人の弟子に対して、「第一の者になろうと望む者は一番後の者となり、またみんなに仕える者とならなければならない」と説きます。そして、一人の子供を弟子たちの真ん中に立たせ、「この子を受け入れる者は、私を受け入れるのであり、神を受け入れるのだ」と話すのです。自分が一番イエスを理解している、自分が一番イエスを支えていると思っている人が一番偉いと思うのではダメで、一番最後を選ぶ謙虚な人を自分は引き上げると言っているのです。

聖書には、厳しい言葉もたくさんあるのですが、私のような緩い信者の救いとなっている箇所もあります。私がいつも救われたと思うのは、ルカによる福音書 15 章 11 節から始まる「放蕩息子のたとえ」の話です。

イエスは、弟子たちに次のような話をします。あるお金持ちに二人の息子がいました。弟の方が父親に、「私が相続するはずの財産をください」と要求して、その財産を持って旅に出ました。旅先で放蕩の限りを尽くして財産を使い果たし、間の悪いことに、その地方に深刻な飢饉が起こって、食べ物にも困るようになりました。ユダヤ人が食べてはいけないとされている豚の世話をさせられ、豚の食べるいなご豆で空腹を満たすしかありませんでした。弟は、「お父さん、私は天に対してもあなたに対しても罪を犯しました。どうかあなたの雇い人にしてください」と言って、父のもとに帰ってきました。父親は、息子がとぼとぼと帰ってくる姿を見て哀れに思い、抱きしめて何度も口づけをしました。そして、いい着物を着させ、手には指輪をさせ、太らせた子牛で彼をもてなしました。そのことを知った兄は、怒鳴り込んできて、「私は忠実に父の言いつけに従ってきたのに、友人と祝宴を開くために子山羊一匹も殺してもくれなかった。なぜ、放蕩のかぎりを尽くして帰ってきたヤツにそんなに優しくするのですか」と不満をぶつけます。父親は、こう答

えます。「子よ、お前はいつも私と一緒にいる。私のすべてのものはお前のものだ。しかし、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、私が祝宴を開いて喜び合うのは当たり前じゃないか」と答える。こういうエピソードです。

イエスが弟子たちに話すこのたとえ話には、「悔い改め」という、キリスト教にとって、とても大切な要素が入っていますが、それはさておき、兄の方の感情的な反応はとても自然で、私たちも共感できると思います。兄が怒るのは当然で、父親の行動には何か釈然としないところがあると感じるのではないのでしょうか。

そもそも、イエスに従って行った弟子たちも、ヤバい人たちが多かったような気がします。たとえば、漁師の出身者がいます。ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネです。彼らは、ガリラヤ湖で魚をとっている時に、イエスにリクルートされ、弟子になるわけですが、まともな教育を受けたとは思えない人たちでした。あるいは、聖書には、徴税人のマタイがリクルートされる場面も描かれています。徴税人は、帝国ローマに送る税を集める人たちで、当時のユダヤ人から嫌われ、差別されていた存在でした。

古代キリスト教の教えの基礎を築いた人に、パウロという人がいます。この人は熱心なユダヤ教徒で、ユダヤ教徒から見るとんでもないことを言っているキリスト教徒を弾圧する、その最前線にいた人でした。イエスが亡くなった後、この筋金入りの弾圧者を神はシリアのダマスカスでリクルートします。そのパウロが、地中海一帯を宣教して回り、あちこちに教会組織を作っていくのです。結婚式の時に朗読される、有名な聖書の箇所、「愛は忍耐強い。愛は情け深い」という言葉で始まる箇所は、このパウロがコリントにいる信徒に向けて書いた手紙の一節なのです。

旧約聖書を読めば分かりますが、ユダヤ教は民族宗教であって、ユダヤ民族でない人間に、布教はおろか一緒に食事することすら禁じていました。ギリシャ一帯でパウロが行った異教徒への宣教は、当時のユダヤ人からすれば、ありえないこと、パラダイムに反することだったと思います。

昨年、ローマのフランシスコ教皇が日本に来ました。フランシスコ教皇は、266代目ですが、その1代目は、イエスの一番弟子のペトロでした。古代キリスト教の指導者なので、普通は神格化というか、いいところしか記録に残したくないだろうと思いますが、聖書のあちこちに、ペトロのダメな部分が描かれています。失言して「サタンよ、下がれ」とイエスに怒られたり、最後の晩餐のあと、イエスが囚われて裁判にかけられ、その様子を心配して裁判の様子を見に行くのですが、周りの人に弟子じゃないかと疑われ、3回も「イエスなんて知らない」と答えてしまったりします。ゴルゴダの丘について行ってイエスの死を見届けたという記述がないので、処刑にも立ち会わなかったのではないかと思います。そういう人間が今のキリスト教の礎となったのです。

聖書における逆説の最たるもの。それが十字架だと思います。十字架とは何かと言うと、イエスが処刑された時に磔になった、あの形です。十字架を背負わされて、ゴルゴダの丘への長い道のりを歩いて行かされた状況が伝わっています。十字架は、自分たちが信じてついて行った指導者、導き手が、いわれのない理由で処刑された時の象徴であって、普通は忌み嫌うはずです。思い出すのもいやなもの、見たくもないものだと思います。その形を私たちキリスト教徒は大切にしており、これが神の栄光の象徴であると信じていて、祈りの前と後に十字を切るのです。普通の神経では考えられないと思います。

聖書の中には、このように、私たちのパラダイムを揺さぶるメッセージがたくさん出てきます。

今、新型コロナウイルスに直面して、これまで当然だと思っていたことがガラガラと音を立てて崩れ去っていき、そんなプロセスを私たちは体験しています。大学のキャンパスには、学生が集まり、教室で授業を受け、授業の前後に友達と語り合う。そういった当然の日常が失われてしまいました。その前提、パラダイムがなくなった時に、何が私たちにとって大切なのが見えてくるのではないかと思います。

人間の感情の流れを疑ってみる。どこかの国の大統領のように、感情のままに話したりツイートしたりするのはなく、いったん立ち止まって考えてみる。そういう日々の生活の積み重ねの先に、新しいパラダイムが見えてくるのではないかと思います。

2020年10月21日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録